

平成3年2月9日 歴史散歩資料

けやき荘 歴史散歩教室

古志賀谷氏館跡と板碑

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

歴史散歩教室 史跡めぐり 案内 (古志賀谷氏館跡)

とき 平成3年 2月 9日 (土曜日)

集合 北越谷駅 午前8時30分 発

コース 1、板碑発見場所 〓南荻島境 〓旧大神宮跡 〓神明神社 (車中)

2、古志賀谷二郎館跡 〓迎撰院 〓古志賀谷二郎館跡 (車中)

3、元荒川発見板碑 〓越谷市歴史資料館 〓三田方遺跡公園

4、古志賀谷四郎館跡 〓八幡神社 〓文和二年板碑 〓澄海寺跡 〓四郎構え掘遺溝
〓陸羽街道 〓取り水口 昼食

5、古志賀谷太郎館跡 〓御門見通 〓御殿裏通り 〓館跡取り水口 〓館跡(会田喜一
郎氏宅) 〓馬洗場 〓建長元年板碑 〓首塚跡 〓天嶽寺内遺溝

主催 越谷市社会福祉センター けやき荘 歴史散歩教室

案内者 山崎 善司 越谷市郷土研究会 理事

古志賀谷氏館跡

古志賀谷太郎館跡

古志賀谷氏が、歴史上に見えて来るのは、千葉大系図・野与党系図中に、九郎大夫経長を祖とする箕勾系に、箕勾左兵衛尉為光の弟、古志賀谷二郎為基の名が見えて来る。

註、千葉大系図 Ⅱ 経長の子、龍大夫十郎行長 野与党系図 Ⅱ 九郎大夫経長 より分派

この為基が、何時頃の人物かと言う事は、即断は困難で有るが、千葉大系図を見ると、古志賀谷二郎為基から見て、曾祖父に当る、箕勾二郎経長の弟に渋江五郎光衡（八条）が居る。

この光衡に付いて、吾妻鑑の建暦三年（一二二三）五月の項に、「（前略）但し、地頭渋江五郎光衡は本所の如く安堵被下可之由被仰下可所也」と見え、既に建暦三年二月は、地頭に補任されていた。

又、その居住したであろう古志賀谷氏の館跡の周辺に、建長元年（一二四九）の板碑を見る事が出来る。以上の事柄から判断すると、大体建保（建長）（一二一五（四九））の頃に生存した人物と言える。

尚、推測で、年代を合わせるならば、参考資料1、千葉系図（仮説）の如く成る。

五郎光衡は、建暦三年（一二二三）既に地頭、仮に60歳とすると、建長元年（一二四九）板碑が、為基の没年とすれば、仮に、建暦三年の時、為基8歳、建長元年で34歳位となる（4人の男子が居た）、二代四郎為重が、この年（一二四九）に1歳とすれば、25歳で三代太郎秋近が生れたとして嘉暦元年（一三二六）板碑が秋近の碑とすれば、52歳没となる。貞和三年（一三四七）の板碑を四代目某の没年とし、秋近23歳の時の子とすれば50歳没となり、一応年代的には符合する。

1、板碑発見見場所 (遠望)

越谷市神明下と南荻島との村境で、元荒川中州の川の中から板碑が沢山発見された。

康正三年(一四五七)を上限として寛正・応仁・文明・明応八年(一四九九)迄四十数年間に渡る年の板碑が、然も、元荒川の河床から出て来たと言う事は、何を意味するのであろうか？

この板碑こそが、古志賀谷氏の滅亡に関する、唯一つの、証拠と成る板碑では無いかと思われるのである。

この問題に関しては、私著「古志賀谷氏館跡思考」に記したが、発見された板碑は、今、越谷市歴史資料館に保存されて居る。

この板碑の発見者、桃木源之助氏は、当時の事を次の如く語って居る。『投網で魚取りをして居る時に、板碑が網に懸かった、引き上げて見ると後から後から沢山出て来るので驚き、迎摂院に届けた。川に潜ればまだまだ沢山有る』。又、『その辺では、時々人骨らしき物が網に懸かる事が有り、足の骨と分かる物も有った』と言う。

嘗て、此処に合戦塚が在り、供養の板碑が上げられて居たと考えられ無いだらうか？

註、元荒川は、以前は北越谷小学校の辺りを流れて居た、堤外地の地番が今も残っている。

神明神社

神明橋から土手を下り50mの所、浦和・越谷線の県道端南側に在る。嘗て神明宮は、今の神明橋の所、土手の中で川の流れの西岸端に在ったが、橋が出来るに際し、今の所に移転と成った。

地元の古老曰く、「元の宮は、今の何倍も有ったが、神明橋が出来た時移転立替となり、敷地が無いので、小さく建て替え今の様に成った」と。



旧大神宮とは、今の神明橋の所、流れに削り取られて川の中と成ってしまった。その後建てられた宮が、これも土手の中の流れの端となり建つて居たが、橋が出来るに際し浦和県道の端に移転と成る、明治二十八年の地図によると、土手の中、流れの端に神明宮と見えるのは、これである。

神明下村は、川に沿って長い村である。嘗て、参道の長い神社が在り、その神社付きの村と言える。四町野村迎撰院は、越谷山神宮寺迎撰院と云い、大神宮とは密接な間柄を思はせる名である。古老の話によると、『元のお宮は、五里四方には、是より立派な神社は無かったと云われて居た』。

新編武蔵風土記稿 「大神宮」と在る。

2、十古土心賀公一 二郎館跡

古志賀谷二郎館跡は、四丁野（現宮本町二丁目）の迎撰院とそれに隣接する、会田太郎兵衛屋敷跡と、今は川の中に成ってしまった、大神宮を含めた地域が、古志賀谷二郎か四郎かは定かでは無いが、その館跡である。

註、元の四丁野村は、今は廃止して宮本町となる。

古志賀谷二郎館跡 （四丁野会田太郎兵衛家跡と重複）

会田太郎兵衛屋敷跡（現川口市元郷在往）は、勿論、古志賀谷二郎館跡の一部で在る。明治の地図に依ると、宮本一丁目信号より神明下方面に五軒程先（徳村寝具店）は、右折れ道で土手に向い、其の先直進の道は無かったので、迎撰院と会田太郎兵衛屋敷跡は、一区画で有った事が解る。四丁野道を越ヶ谷より、宮本二丁目信号を尚進み、右に折れて土手へ抜け、左折して岩槻方面に向う

道（現土手道）が本通りであった。

会田太郎兵衛屋敷跡を見ると、構え掘が（迎撰院を含む）、屋敷跡を取り囲んでいるし、その外側には神明宮・地藏院・野尻稻荷・弘誓寺・疣稻荷・薬王寺（十王堂）等が取り囲んで居て、古志賀谷氏居住以前、中世以前からの生活の痕跡を見る事が出来る。

註、愛宕様は、元は、四丁野道に在ったが、会田氏が自分の屋敷内に移転（鉄道の為）した。

二郎館跡の構え掘遺溝

取り水口は、迎撰院の西側に在ったが、今は埋められ、東側の四丁野用水より取っている。掘は深く広く良く整った構え掘で在った。

今は、全部コンクリートの側溝となり上蓋が成されて、往時の面影は無い。

地藏院と野尻稻荷

ここ迄が、居住と耕作の可能な土地で、湿地との境に出来た墓地で在るので野尻の地名が残る。野尻稻荷も同敷地内に祀られて在る。

四丁野村除地等 書上、「境内御除地、式反八畝歩 地藏院」

迎撰院

越谷市宮本町二丁目に在る、岩付領末田村金剛院末、真言宗、越谷山神宮寺迎撰院、寺伝に天文四年（一五三五）賢栄法印による中興開基とし、天正十九年、家康より寺領五石の朱印を受領した。当寺は古くから越ヶ谷郷総鎮守久伊豆神社・浅間神社・愛宕等の別当である。

当寺には、

越谷市指定、有形文化財、古文書が所蔵している。

「(前略)天正十九年(一五九一)九月、徳川家康寄進、寺領五石の朱印状が交付され、以来代々の將軍代替り毎に交付を受、全十二通を所持して居る」。

武州埼玉郡四丁野村

書上帳

「御朱印 高五石

迎撰院他、久伊豆神社・浅間社・神明稻荷

社等除地在之」。

板 碑 (迎撰院出土蔵)

迎撰院には、本堂の建て替えの際に出土した、応仁元年(一四六七)の板碑の外、文明十七年(一四八五)・永祿七年(一五六四)外が有る。又、最近墓地の改装の際にも、享祿二年(一五二九)・永祿?等の板碑が出土、同寺が所蔵して居る。

3、一元荒川発見の板碑

(越谷市歴史資料館蔵)

寛正二年(一四六一)六月、「小田原北条記」によれば、「上杉房頭軍二万余騎、成氏軍七千余、越谷野に於て激しく戦い、兩軍多数の戦死者を出し、成氏軍敗走する」と記している。

又、寛正二年(一四六一)九月、東松山市の「箭弓稻荷神社の縁起書」によれば、「越谷野に於て合戦、上杉方勝利」と記されている。

註1、両記述ともに、同一の戦記の如し。

註2、古志賀谷氏はこの時代、古河公方と管領上杉との争に巻き込まれ、最前線の接点に位置し、

論外と言う訳には行かなかつた事で有ろう。

野与党系一族諸家が消滅の頃、即ち、寛正二年の越谷野の合戦の記述が、古志賀谷氏の滅亡の次期と想定出来る事件である。
 それ等の館跡と思われる地点に、板碑が残され、其の存在の痕跡を残すのみである。

神明二丁目地先、元荒川より発見の板碑

康正三年	(一四五七)	四月 九日	妙真禪尼
康正三年	(一四五七)	七月 三日	道金禪門
寛正二年	(一四六一)	一月廿四日	妙心禪尼
寛正三年	(一四六二)	九月 五日	妙口禪尼
寛正七年	(一四六六)	五月 八日	妙仙禪尼
応仁元年	(一四六七)	九月十二日	妙仙禪尼
応仁三年	(一四六九)	八月 八日	妙巖禪尼
文明三年	(一四七一)	七月十八日	妙觀禪尼
文明七年	(一四七五)		口口禪尼
文明七年	(一四七五)		道光禪門
文明九年	(一四七七)		道光禪門
文明九年	(一四七七)		妙慶禪尼
文明十年	(一四七八)		道妙禪門
文明十八年	(一四八六)	二月 吉日	妙心禪尼
文明十九年	(一四八七)	十月二十二日	妙心禪尼
文明十九年	(一四八七)		迎妙禪門
文明口年	(一四口口)		性祐禪門
文明口巳年	癸巳73年	乙巳85年	性祐禪門

註、古志賀谷氏に関する、事跡は何一つ残して居ない。野与党の血を引く古志賀谷氏は、一族の動向と共に、鎌倉・南北朝・室町と各時代を生抜いて来たが、千葉大系図・野与党系図に記載されて居る外は、其の拠点と覚しき地点に板碑を残すのみである。

4、古志賀谷四郎館跡

四郎の館跡は、太郎館跡と地続きで、元荒川が花田地区で大きく迂回して来て付き当たり、又、左に曲折して瓦曾根に至る所、詰り、新町三、二丁目の日光街道（嘗ては土手道）の南側（南町並）の地域が、四郎の館跡、その南端に八幡神社と澄海寺跡が在る。

この神社には文和二年の板碑が所蔵されて居り、この地を取り囲む構え掘を見る事が出来、古志賀谷四郎か二郎かは、定かでは無いが、その生活の痕跡を見る事が出来る。

註、四郎館とした根拠は（参考資料1、千葉系図仮説図参照）、太郎秋近（1274生れ）依り、13才年下と仮定して、1287年生れ、文和二年（一三五三）を没年とい、66才と推定した。

八幡神社

日光街道より参道が有る。石の鳥居を潜ると左に天和二年（一六八二）の手洗鉢が在り、神社の正面前に会田石と記した石が在る、三野宮巳之助が指し上げた石と云われ、奉納相撲が盛んな所であった事が知れる。往時は裏に陸羽街道が通って居り、神社の向きも違つて居た事と思われ。

新編武蔵風土記稿、「文和二年ト刻シ青石ヲ神体トナセリ」
越ヶ谷瓜の蔓、「一、社地二反八畝二歩、八幡宮別当、天嶽寺」

文和二年の板碑

この八幡神社には、御神体として、文和二年（一三五二）の板碑を所蔵している。額に、「当八幡神社御造営之儀者人皇五十九代御光嚴天皇之御宇而將軍足利尊氏之時代文和一

年巳年奉建立即御神体之像御鎮座也、而之自年号及於文政三辰歲迄四百七十三年也、

辰 十月

会田久右衛門
河村朝右衛門

澄海寺跡

この八幡神社の南隣に在ったが、今は廃寺で、空地と成って痕跡を留めるのみである。戦前迄は、日光街道よりの参道が在ったが、今は塞がれて通れ無い。

新編武蔵風土記稿、「羽黒行人派修験江戸日本橋音羽町普門院配下本尊大日ヲ安ズ」。

越谷町鑑、「八畝十四歩、出羽国羽黒山宝前寺末、天台宗宝竜山澄海寺」。

越ヶ谷瓜の蔓、「澄海寺之儀、天台派羽黒山法漸寺末修験之由、古来より右之所に罷居、

祈願之巨家を持取統罷在候、妻帯不仕候、」

四郎館の構え掘遺溝

八幡神社の周囲には構え掘の遺溝が良く残っている。元荒川よりの取り水で、館跡と八幡神社と澄海寺を取り囲み、瓦曾根境に向かって落ちていく。この、取り水口は観音横町の突き当りの坎（いり）である。

陸羽街道・赤山街道交差点

奥州街道と云うは、日光街道の出来る以前、瓦曾根より六本木、中町横の筋が本通りで、本町二丁目の田中青果店と関谷酒店の間の愛宕野道から四丁野へ行く道であった。

越谷瓜の蔓、「(前略)慶安以前元道中は、千住より大原通八条堤より南百西方堤通瓦曾根溜井堤より六本木中町横の筋往還成りしを、千住より中町橋際迄直道に成申候」。

陸羽街道と云は、奥州街道より古い時代には、陸羽街道と云い、瓦曾根の久伊豆神社より、照蓮院脇の観音堂から右に越ヶ谷に向い、薬師堂(修験東正院)より、掘り端を澄海寺・八幡神社脇を通り、四郎館跡の構え掘なりに赤山街道交差点へと向い、越谷小学校で赤山街道に突き当たり、学校の北側で赤山街道と分かれて、浅間神社・四丁野道愛宕神社(現四丁野道鉄道路際)・迎撰院へと向う道である。この道が、古道である証に、山の神を祀る石が、赤山交差点近くの森田氏宅の庭に在る。

註、赤山街道は後から出来た道で、館跡の取り水を分け街道の下を越し、出羽掘に至る水路が有る。

四郎館の取り水口

赤山街道交差点より、日光街道を通り越して、尚進むと、元荒川の突き当りに六本木塚が在る。慶安以前の往還本通りと記されて居るので、観音横町突き当りの、塚(いり)が取り水口で有る。この取り水口は、奥州街道が出来る以前は、もっと日光街道寄りになつたと思はれる。

*越ヶ谷地内(現市役所脇道)奥州街道は人工的に築いた土手道(荒川が入間川に瀬変となる頃)であるので、それ以前の道は、前記の陸羽街道である。

5、古志賀谷太郎館跡

御殿地表通り御門見通し

この通りは、徳川時代のものと思はれるが、館跡を考える時見逃せ無い道である。日光道中より御殿の御門に至る道で、門が見えたので「御門見通り」と言い、付き当たりに門が在ったと思はれる。

御殿下通り

御殿下通りは、国道より、向い側を見ると、日光道中に続く御殿下通りが見える。

この国道を北東に入る狭い横道が、嘗ての、「御殿下通り」である。

この狭い道を入ると間もなく突き当たる、今は行き止まりで有るが、左に折れ土手に出る道が「御殿下通り」である。

道を入ると「庚申塔」があり、ここを右折れする狭い道が御殿地と元御殿地との境道で有る。

*この元御殿町の側が、江戸時代には、御殿番小杉藤左衛門の屋敷跡と思われる。

*古志賀谷氏館の頃は、現在の御殿町と元御殿町を含めた地域が、館跡かと思われる。

館跡取り水口

御殿下通りを土手道に館跡の裏通りで、そこに、古びた木戸がある。この木戸の中に、嘗ては、深い堀が有り、これが館跡の構え堀遺溝の「取り水口」で有る。

今は、構え堀の遺溝は、痕跡のみと成り、土手を潜り排水管が埋められてある。

ここから、取り入れた水が、館の構えを回り、次に案内する天嶽寺の遺溝へ流れて行くので有る。

館 跡 (会田喜一郎氏宅)

御殿、元御殿と言う地名が在るが、それを含めた全地域が、嘗ての館跡ではないかと思はれ、現会田喜一郎氏宅が、その現況を良く残して居る。

越谷町鑑 「一、御主殿跡御見捨地、右御主殿は慶長九年増林村より越ヶ谷に引ヶ申候、然処

明暦三酉年江戸大火にて而御城御焼失の節同年仮御殿に引申候、
「一、御殿地之儀、本町裏にて而在御取払後御林と相成申候」

馬 洗 い 場

葛西用水御殿橋を渡ると二軒目、左に折れる二間幅程の道が在る。この道を道なりに北北西に行くと元荒川土手に突き当たる、尚川の中程迄進むと、そこが「馬洗い場跡」である。

対岸に近い所迄線を引き、上流400mに市神社がある、そこから、天嶽寺裏旧河道の土手に向って線を引き、その接点に当たる所、川の流れの中央地点辺が、嘗ての馬洗い場と云われる所有る。

註、嘗て、元荒川は、天嶽寺裏から花田地区を柳原迄、大きく迂回していた。

越ヶ谷瓜の蔓、「一、馬洗場と申候は、元荒川へ石畳にて而下り申候、会田出羽騎馬裾場の跡也」

「市神社より馬洗い場迄、式百間」、
「御殿屋敷向堤通元荒川曲角手前馬洗い場と云、石畳にて而川へ下り申候、
会田出羽裾場也」

建長元年板碑

御殿稲荷の隣に、越谷市の文化財として川の端に建っている。元は、宮前橋からの二又道の所に建っていたが、文化財に指定された時、今の所に移された。

建長元年板碑は、越谷市有形文化財に昭和四十五年三月二十五日、市指定となった。越谷市内発見の板碑の中では、最古のものである。高サ1.55m、幅0.56m、市内最大のもので、種子は、梵字の弥陀一仏で、その彫りは深く、鎌倉期の特長を良く現わしている。

古志賀谷氏館跡の痕跡は、地形の他には、確實なる手掛かりに成る物は、この板碑のみで有る。この館跡の区域は、その後、天文弘治の頃、会田出羽資清の屋敷と成り、二代資久の時に慶長九年（一六〇四）に至り、徳川家康の為に御殿を築き差し出してより御殿地域と成ったもので有る。

御殿稲荷と首塚跡（ちよっぼり山）

御殿稲荷は、宮前橋（寺橋）を戻り、右折れすると二又道に出る、右土手道を行くと、川側に御殿稲荷が在る。大正十三年の河川改修の時に、川の中となった所に在った社を、今の所に移して稲荷を祭祀し、御殿町持ちの稲荷とした。

註、「越ヶ谷瓜の蔓」に、四社権現が在ったと記して在るので、元は四社権現かと思はれる。

首塚跡は、御殿稲荷の向い側に、嘗て、木が生い茂り、小高い盛土の所が在った。そこが「首塚跡」（ちよっぼり山）である。

今は平に馴らされて其の場所の確認は不明であるが、古老の話では、「御殿町四四八四地内、土手道の堀の内側に寄った所に、木が繁り小高く土が盛り上がった所が有り、昔から人が寄り付かぬ場所であった」と云う。

越ヶ谷瓜の蔓、「是は、会田出羽手前仕置候者埋申候場所の由、又は、ちよっぼり山にて而

頭に似候付申候由、
「御殿屋敷四社権現宮在り併頭塚在り、山の形古来頭に似たる故申せし共、
又出羽手前仕置之者埋し場所之跡成共」

天嶽寺・久伊豆神社内の構え掘遺溝

葛西用水の樋口橋を渡り、御殿稲荷の前を尚、進むと宮前橋（寺橋）に出る。川を渡り直ぐ左を見ると、久伊豆神社参道入口が在る。其の左に庚申塚、尚、左に天嶽寺入口の御影石の門柱が見える。御影石の門柱を過ぎると、左右に石塁が在り、20m程の所に左右共、石塁が切れる所が在る。これが、嘗ての、古志賀谷氏館の構え掘の水路である。

註、古くは、現在の川は無くて、天嶽寺とは地続きで有つた。

越ヶ谷瓜の蔓に、「元荒川の儀、大沢境古川小林境古川之通、増林村迄迂遠に有之所、慶安二
三年中、天嶽寺掘通に相成り申候」

水路は、石塁の切れた所を越すと、直ぐ左折し、お地藏様の後を通り石塁の終る所で右折れし、久伊豆神社の参道一の鳥居の先を横切る、石の太鼓橋の下を通り、花田村への街道（岩井街道）沿いに左折する。水路は更に、道端を二の鳥居迄流れ、右に折れて街道を横切る。

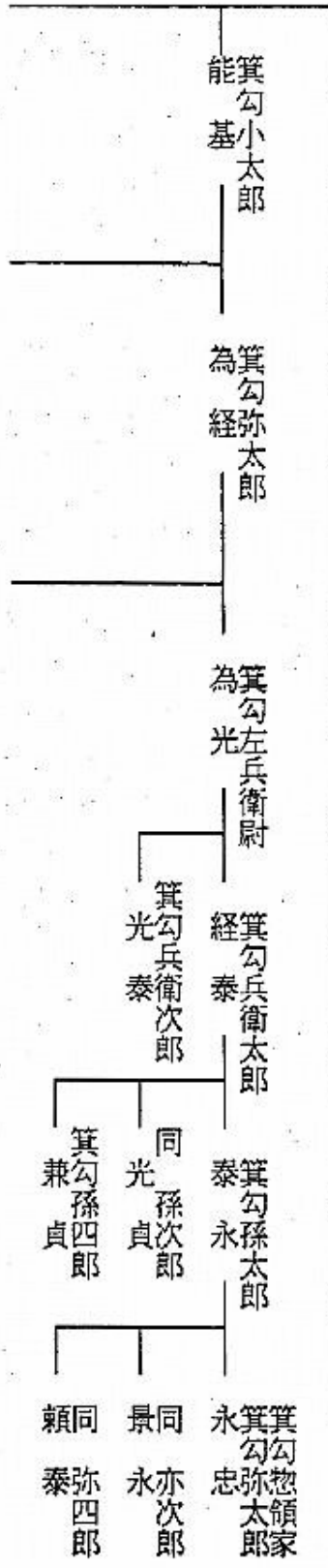
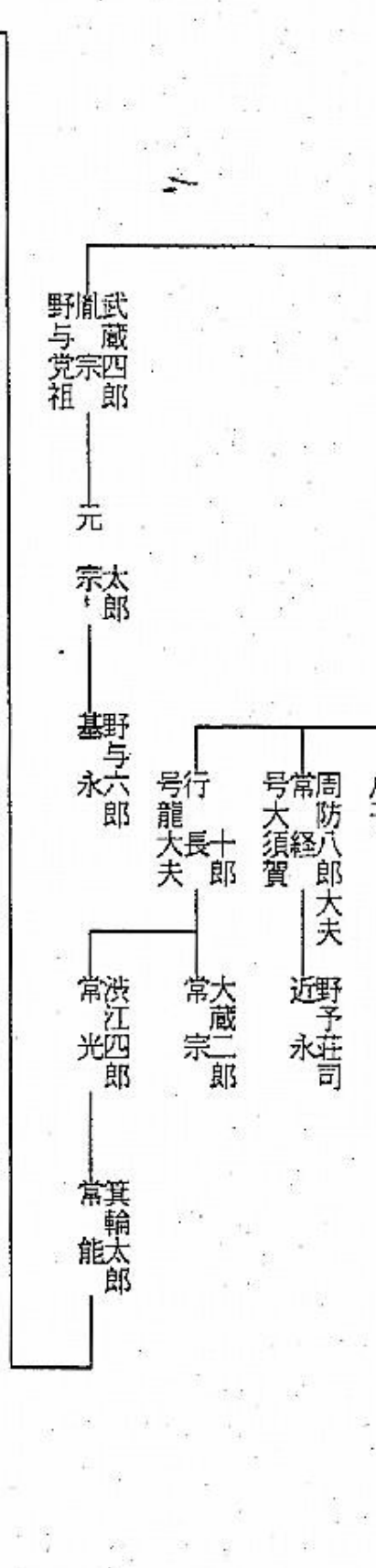
滝田氏と一柳氏との間を東に流れて滝田氏と越谷高等女学校（旧校舎の裏に深い水路が有つた）の間を通り抜けると、花田を大きく迂回して来た元荒川（旧河道）に突き当たる処が、水の落ち口となる。この水道が、古志賀谷氏館跡の「構え掘」の水路である。

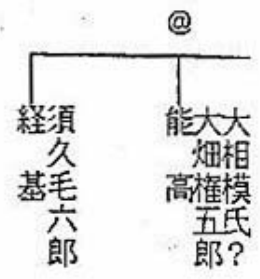
參考資料2、

千葉大系圖 (抄)

桓人皇五十代 皇 平姓ヲ賜フ 葛原親王 高見王 關東二下向 高望王 村岡五郎 鎮守府將軍 陸上下總常介 忠賴 寬仁二年卒 坂東八平氏祖 天慶二年十二月卒

武藏押領使 上總介 長元四年卒
 千葉氏初代 上總權介 承保三年卒
 二代 常長 天仁元年卒
 三代 上總兼介 常兼 大治元年卒
 四代 千葉大介 下總權介 常重 治承四年卒
 下總介御厨下司 常胤 正治三年卒
 以下略

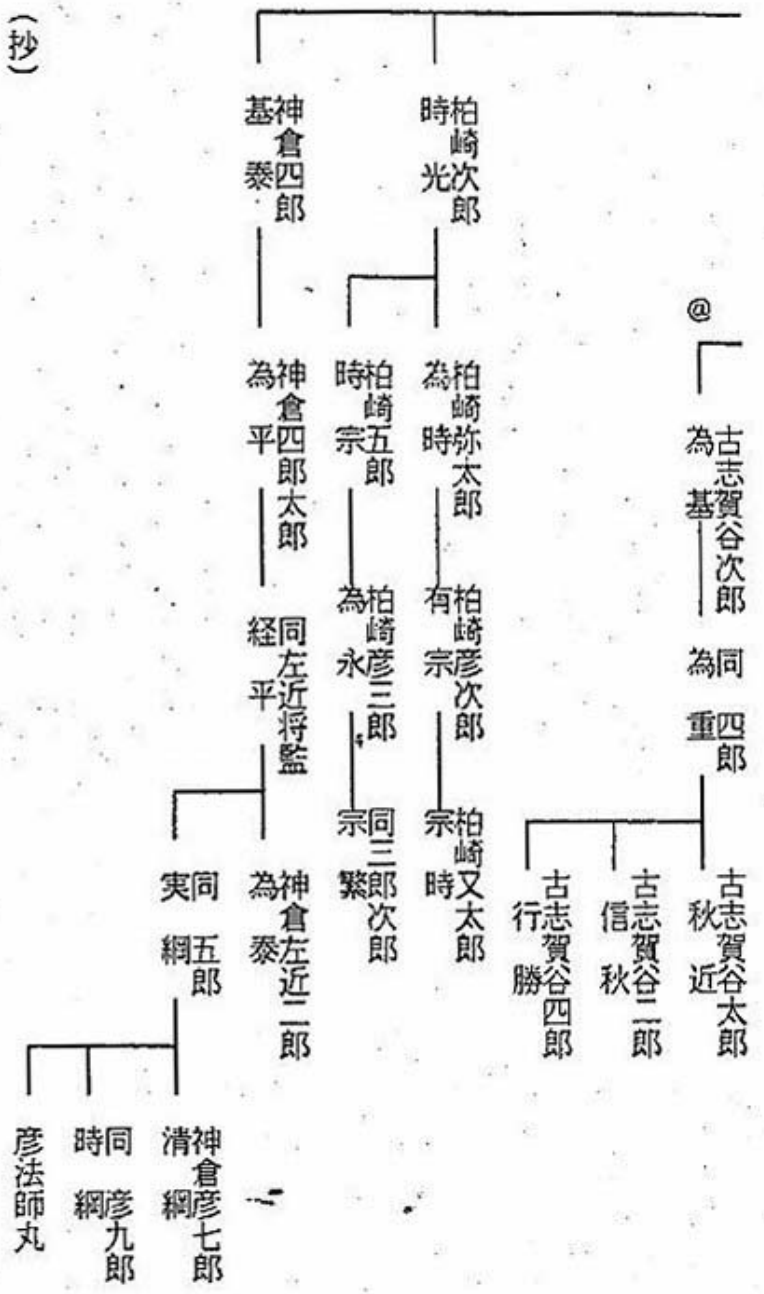
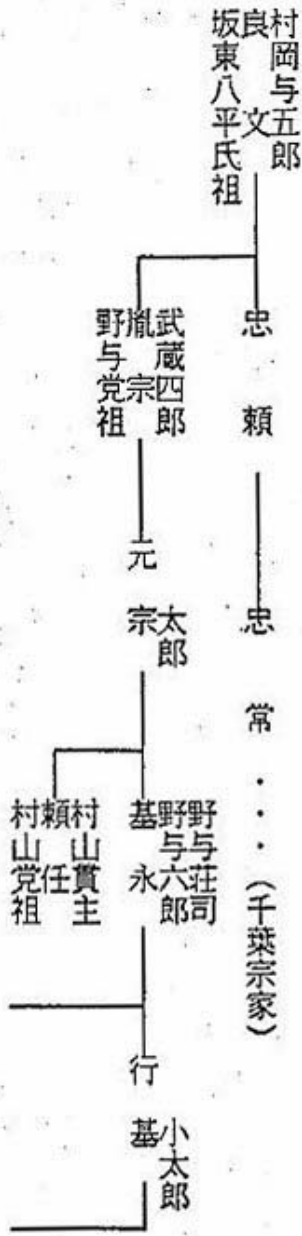


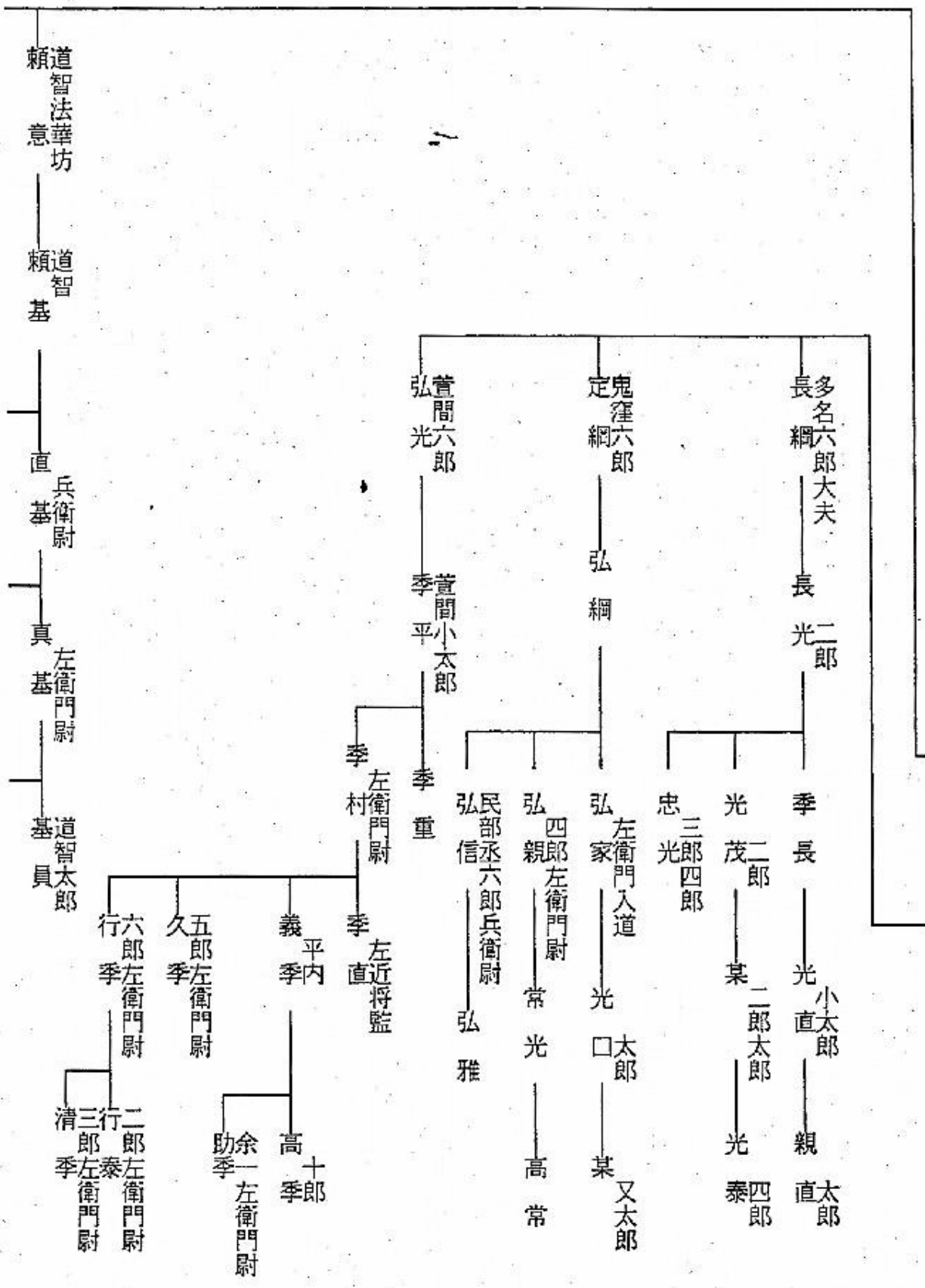


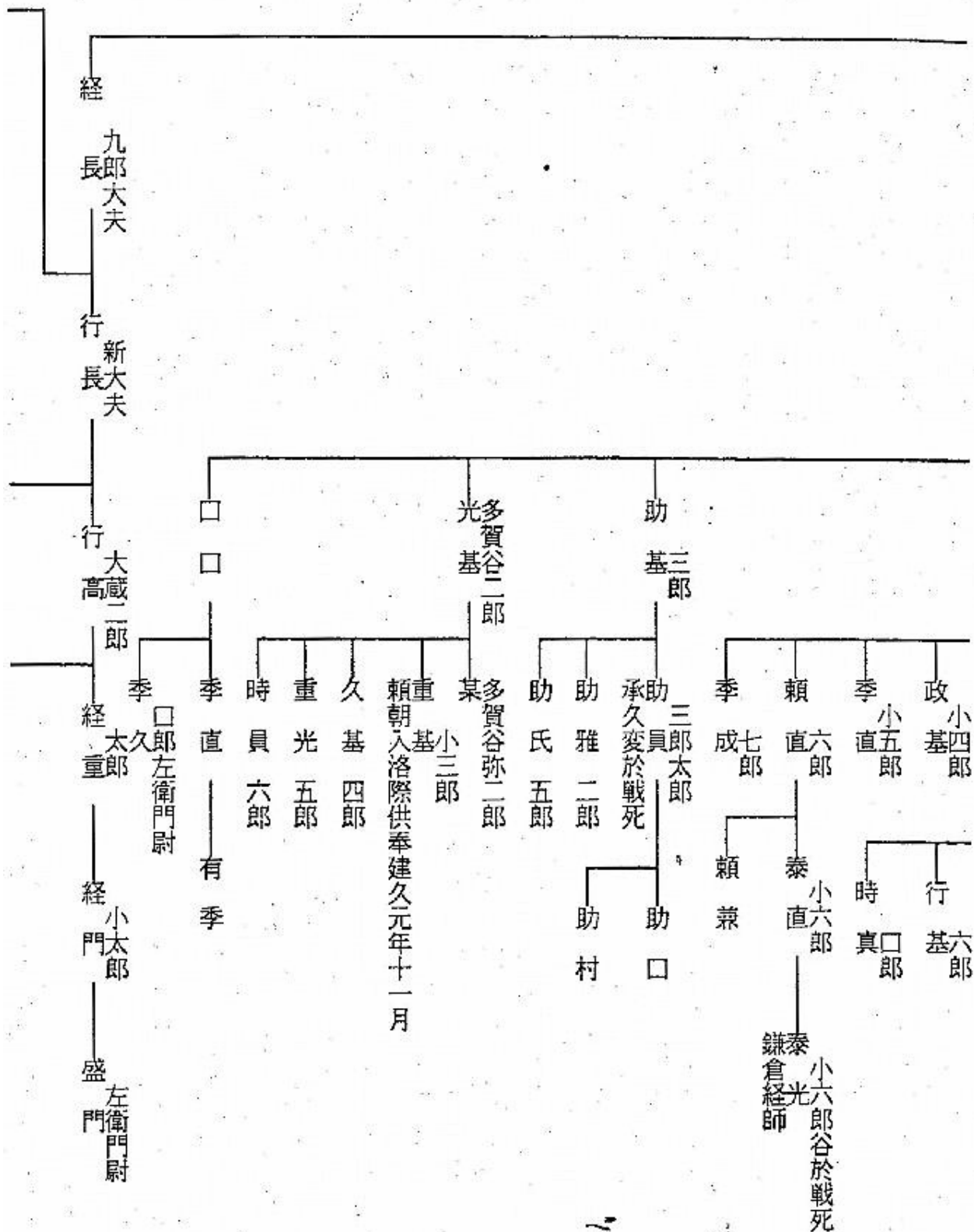
以上千葉大系図 (抄)

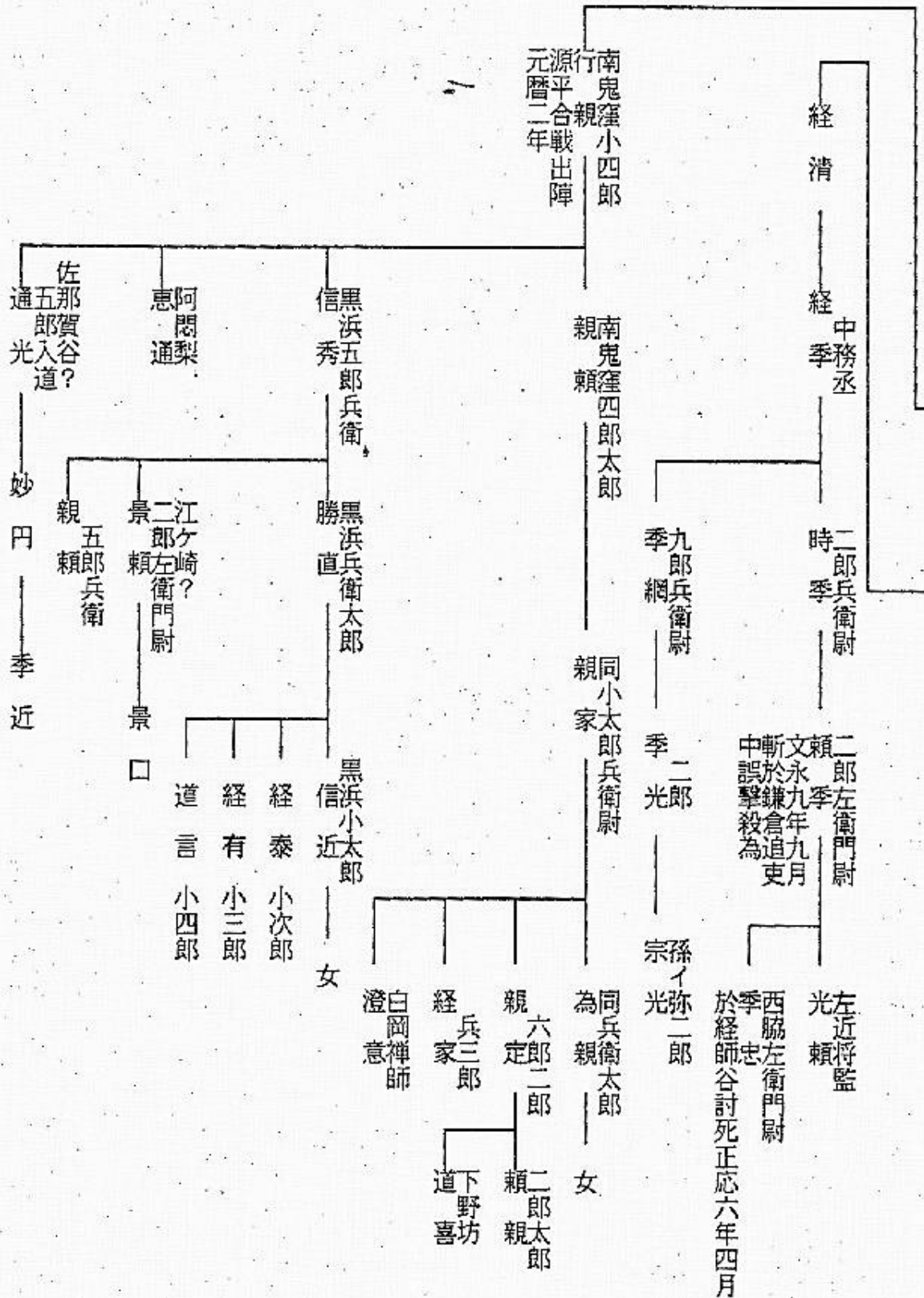
参考資料 3、

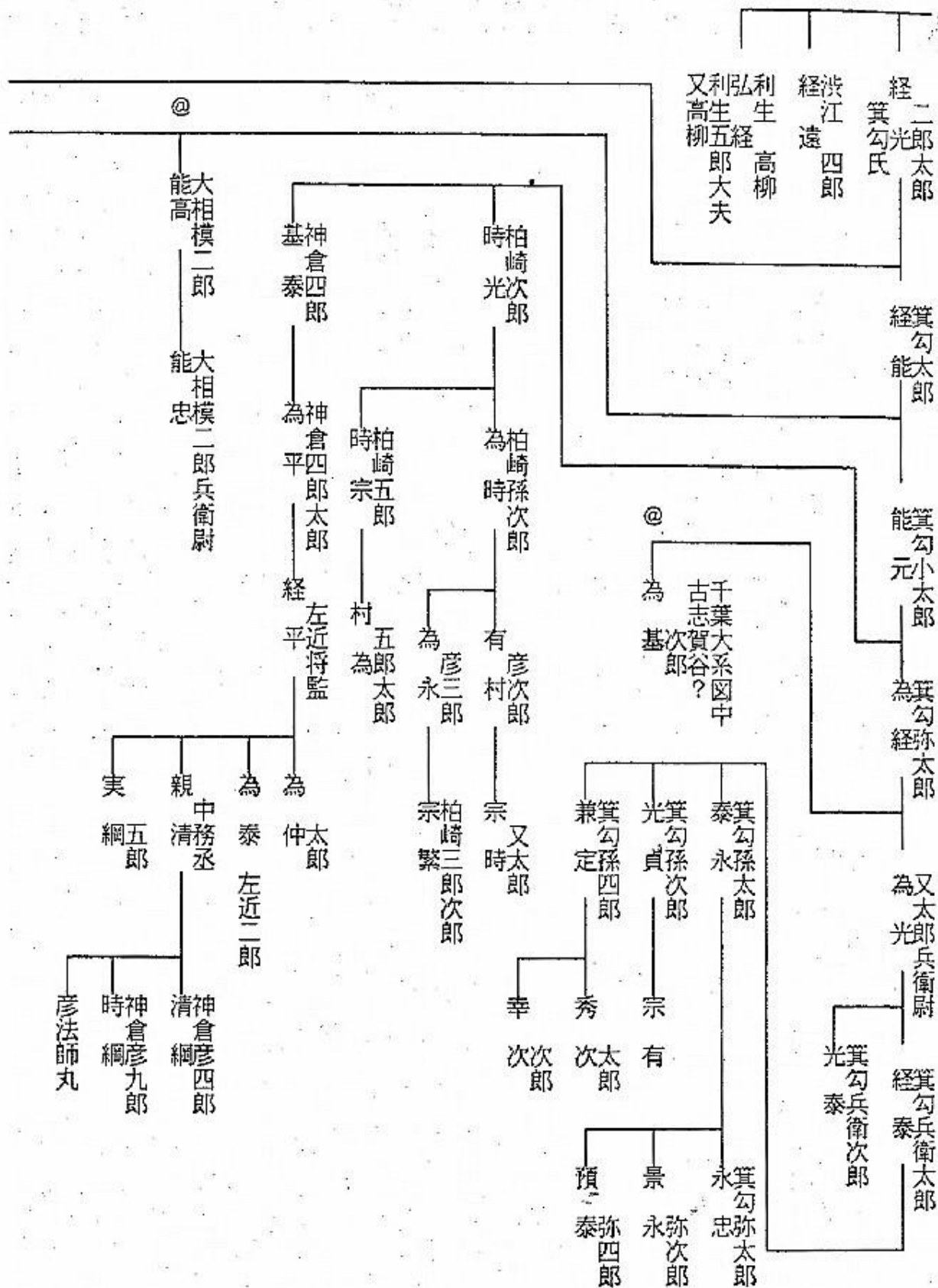
野与党系図











須久毛六郎
經元

能直

行直
中務丞

須久毛太郎
行信

須久毛孫太郎
常繼

仲信七郎

信常七郎二郎

上野阿閤梨

助能中務丞

明瞬九郎

道瞬坊

能行九郎

賴瞬

常直十郎

泰常十郎太郎

經繼

須久毛二郎
能定

能直四郎

須久毛左衛門五郎
經員
橫根氏

為定五郎次郎

經定小太郎

須久毛六郎
行景

次通同平三

行道同弥三

同二郎太郎
經頼

阿閤梨

太郎

同八郎

又太郎左衛門尉

有某

有時

有光
洪江小四郎

有
洪江左衛門尉

有久
太郎左衛門尉

有成
太郎左衛門尉入道

有
又太郎左衛門尉

八条平五郎
光平

兵衛尉
景光

信光氏

有光
洪江二郎左衛門尉

有茂
太郎

有金重一郎左衛門尉

時平

有元

有季茂
野崎兵衛尉(野島?)

有野島?

有光

有茂

有金重一郎左衛門尉

有野島?

有光

有季茂

有野崎兵衛尉(野島?)

有野島?

以上野与党系図(抄)

題名	古志賀谷氏館跡と板碑
主催	越谷市社会福祉センター けやき荘 歴史散歩教室
案内者	山崎善司
後援	越谷市郷土研究会
発行日	平成3年 2月 9日
発行所	越谷市弥生町1の9 山崎企画工房 ☎ 6213733